TRAIL RUN

トレイルランニングをこよなく愛する人たちに贈るディープな情報

160回 JANUARY

トレイル通信

文／吉本 亮

特別企画❺

トレイルレース今昔物語 2007年 OSJハコネ50K ～語り継がれる伝説の大会～

現在でこそ50㎞のトレラン大会はいくつもありますが、2007年当時はハセツネの71・5㎞は別格として、ロングだと30㎞台が普通でした。そこに、55㎞という、ザ・ノース・フェイスの冠大会が箱根で開かれるとのこと。トレラン界はざわつきました。

アクセスよし！

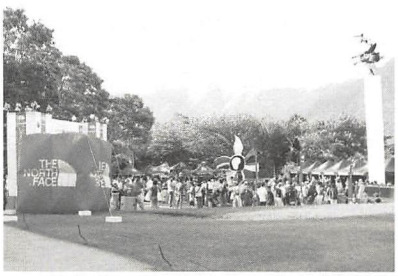
売り文句が「景色よし！ 温泉よし！ アクセスよし！ と三拍子揃った大会」とあるだけに、会場へ電車で行けるのは便利でした。しかも、小田急ロマンスカーで行けば快適で、モチベーションも上がってきます。宿泊は古くからある温泉宿を予約し、前夜も楽しめるイベントとして現地入りしました。

豪華な参加者リスト

参加者には、優勝した鏑木毅選手はいうまでもなく、13年たった今でもアドベンチャーレース、オリエンテーリング、TJAR、ウルトラマラソンなどの第一線で活躍しているランナーの名前がありました。10人のハセツネ優勝経験者のほか、日本三百名山ひと筆書きにチャレンジ中の田中陽希さんや、当時のクリール編集長だった樋口さんもいるなど、今となっては同時に集められないメンバーです。

華やかな受付会場

箱根彫刻の森美術館の特設会場に到着すると、強風でテントが飛ばされそうななかで受付が始まっていました。オブジェが鎮座する芝生の会場にエキスポが用意され、ステージでは新作のパックが披露されていました。



(上)彫刻の森美術館の芝生に設けられたエキスポは、トレラン大会とは思えない上品さ(下)勾配21%の急坂の途中からスタート

マーティンウィングの登場

従来のトレランパックは小型のバックパックでしたが、この日に斬新なデザインのトレラン専用パックが登場しました。鏑木選手と横山峰弘選手が共同で開発したマーティンウィングです。

ウエストベルトに大容量のポケットが付いて、逆にメインコンパートメントは細い特異な形状でした。これは、背中にドリンクとレインウエア類だけを入れ、補給食はウエストのポケットに入れる、トレランに特化した作りのため。マーティンウィングはその後も改良が重ねられ、現在では6、10、16ℓとLTの4種類が展開される、息の長いモデルとなっています。

飽きないコース構成

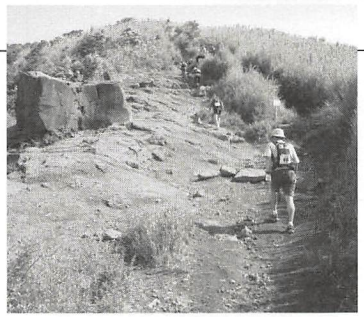
スタートは午前6時、箱根ガーデンミュージアム前。勾配21%の表示がある急坂の途中で待機しました。前日の受け付け時から国際レースのような雰囲気でドキドキでしたが、10分も走ると渋滞が始まり、30分後には階段も出てきて落ち着いてきました。

その後の尾根筋は、背の高さほどのススキが茂っているので見晴らしがないときもありましたが、ときおり芦ノ湖が見えたり、先々のトレイルに参加選手を見つけたりと、箱根の外輪山らしい風景を楽しめました。湖畔はキャンプ場を抜けるため、いい匂いでおなかが空いたり、最後のピークである神山へはヤブがひどかったり、V字断面のトレイルで走りにくかったりと、最後まで変化のあるコースでした。

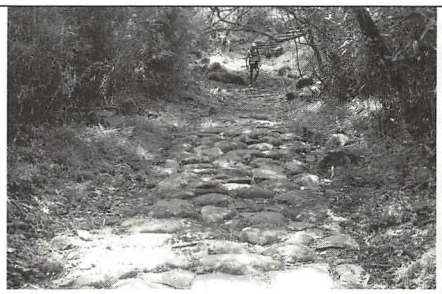
そして、ゴールではレースを締めくくるにふさわしい演出が待っていました。

ゴールは夜が◎

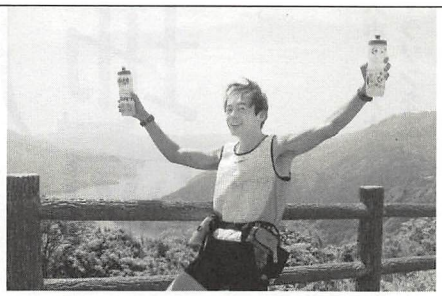
舗装路を走っての会場までの道のりは、街ナカではないために寂しく、アナウンスの音が次第に大



(上)背の高いススキで周りが見えないこともある、特徴的なトレイルが尾根道にずっと続く(下)たまに視界が開ける

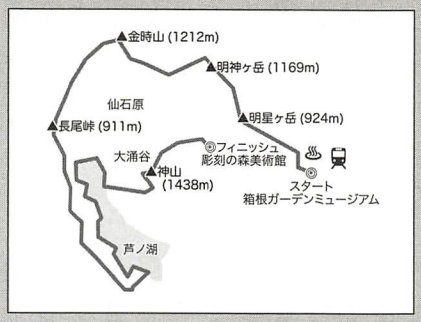


芦ノ湖へ下るところでは石畳となる古道もあり、歴史が垣間見られる



当時の筆者はウエストバッグにボトルを2本、ウエアはノースリーブが基本だった

THE NORTH FACE「エンデュランスランOSJハコネ50K」OSJ箱根トレイルレース



日時:2007年5月27日　参加費:8000円
申し込み:郵送と郵便振替　制限時間:14時間
募集人数:2000人、参加人数:男子995人、女子149人
完走者数:699人、DNF約360人　コース:箱根ガーデンミュージアム〜塔ノ峰〜明星ケ岳〜明神ケ岳〜金時山〜長尾峠〜三国山〜海ノ平〜(湖畔トレイル)〜湖尻〜神山〜早雲山〜強羅〜彫刻の森美術館

男女それぞれ上位1名は特別賞でUTMB(ツール・ド・モンブラン)に招待された。鏑木毅選手が6時間29分、間瀬ちがや選手が7時間40分で優勝し、UTMBの結果はそれぞれ12位とDNFだった。

立派なゴールゲート。夜になるとライトアップされて、さらにドラマチックなフィニッシュとなった

〝ラスボス〟となる神山への上りは、先が見えないヤブとなる箇所が何度も出てきた

きくなってくることでゴールが近いことが分かります。その後、暗いトンネルを通って明るいところに出ると、そこに音楽と声援にわく別天地のフィニッシュゲートがありました。

日が暮れてからのゴールはさらにドラマチックで、カクテル光線が舞うなか、スポットライトを浴びてゴールに飛び込むのは日本のトレラン史上初（?）で、今でも語り草になっています。

ロング練習にぴったり

レースが開催されて一気に箱根のトレイルが身近になったためか、ロングの練習に使うトレイルランナーも増えました。終電で集合して暗闇を走り、お昼にゴールした後は温泉に入ってロマンスカーで反省会をしながら帰るプランも人気です。これだと無理して朝早く集まらなくてもいいし、密とならない温泉と電車を利用できて合理的です。

第2回は幻に…

レースは成功に終わったので第2回も予定されましたが、反対派と環境省の要請を受けて急遽1月に中止となりました。たとえ大会によるゴミがほとんどなく、登山道の損傷がなくても、反対をする人はいるものです。表向きには環境問題によるものでしたが、箱根は温泉をメインに、落ち着いたイメージでお客さんを呼びたかったのかもしれません。

陸上競技者で「箱根を走った」と言えば一目置かれるように、トレラン界でも「ハコネを走った」と言えばうらやましがられるのは、期待されながらも1回で終わった大会だったからでしょう。

その後のハコネ

第2回の開催予定日には、参加賞のTシャツを着た同志が集まって同じコースを走りました。今でもそのTシャツを大切にしている人は多く、ハレの日の勝負服として着る人もいます（筆者含む）。

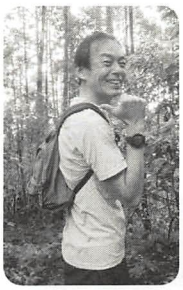
気さくだった名選手

ザ・ノース・フェイスの契約選手、ディーン・カルナゼスさんが参加しており、彼と同じくらいの位置を走っていたので何度も話す機会がありました。50のマラソンを全米50の州で、50日間連続で走る<THE NORTH FACE エンデュランス50>の話が興味深く、ハワイとアラスカへの移動が大変だったとのこと。この大会は、湿度の高さが嫌いだった模様で、結果も114位と振るいませんでした。

招待選手のディーン・カルナゼス選手と。レース途中の渋滞箇所で気軽に撮影に応じてくれた

総合順位	No.	氏名	年齢
1	2	鏑木 毅	38
2	225	森下 勇樹	22
3	393	相馬 剛	33
4	322	留月 将悟	29
5	196	野本 哲晃	32
6	224	井川 朋幸	29
7	161	田中 正人	39
8	130	渡辺 千春	40
9	429	樋山 邦治	24
10	957	佐々木 裕之	30
11	3	横山 峻弘	38
12	978	大内 直樹	32

(右上)パンフレットの表紙。ページの最後が郵送用の申込用紙になっているところに時代を感じる　(左上)後日送付されたリザルトには、トップの鏑木毅選手を始め、トレラン界の豪華メンバーたちが名を連ねている　(右下)参加賞のTシャツは、胸にワンポイントのみのシンプルなデザイン。今でも大切に着ている人をよく見かける　(左下)参加賞の1つのエコバッグ。今となっては必需品だが、当時はあまりピンとこなかった



吉本 亮
よしもと・まこと

2002年に富士登山競走に出るも8合目手前で失格。同年の初マラソンは福知山で4時間。生活を2時間前倒しにして朝ラン開始。練習嫌いですが、月間300㎞を超えちゃいました。